粕屋町文化財調査報告書第 55 集

内橋柚ノ木遺跡第 2 地点

2021
粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、県道福岡東環状線拡幅工事に伴い、令和元年度に粕屋町教育委員会が実施した粕屋町大字内橋字柚ノ木に所在する内橋柚ノ木遺跡第２地点の発掘調査の記録であります。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、糟屋郡最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土した内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴資専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良込田遺跡、糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡などの奈良時代の遺跡が周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ駅路が調査地近辺を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、隣接する内橋鏡遺跡では朝鮮半島文化との交流を示す「新羅土器」が出土していて、今回の調査においても朝鮮半島系の遺物が確認されています。今後、周辺地の調査が進むにつれて、対外交流の状況が次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和 3年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長　西村　久朝

目　次

3　経過・位置と環境
4 調査に至る経過
4 調査体制
5 地理的環境
5 歴史的環境

7　調査成果
8 遺跡の概要
8 掘立柱建物
11 土坑
16 井戸
22 石敷遺構
24 溝
26 不定形遺構
26 包含層
31 総括

33　図版

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	県道福岡東環状線拡幅工事
現地調査	平成31年4月22日～令和元年12月27日
整理調査	令和2年4月1日～令和3年3月31日
使用方位	座標北(国土座標第Ⅱ系[世界測地系])。真北に対して0°17′西偏。
遺構実測	西垣彰博、福島日出海、朝原泰介
遺物実測	福島日出海、朝原泰介、常盤拓生、上田津由美
製図	西垣彰博、毛利須寿代、上田津由美、松永メイ子
遺物撮影	高橋幸作、西垣彰博
遺構撮影	西垣彰博、朝原泰介
執筆/編集	西垣彰博
資料整理	常盤拓生、水上良行、山下真美、岡部有貴

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

本書の編年は以下を用いた。
須恵器
『牛頭窯跡群』総括報告書Ⅰ　大野城市教育委員会 2008
『須恵器大成』田辺昭三 1981
陶磁器
『太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類－』太宰府市教育委員会 2000

経過・位置と環境

経過・位置と環境

図１　内橋柚ノ木遺跡第２地点位置図（1/400,000）

調査に至る経過

内橋柚ノ木遺跡第２地点の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字柚ノ木566-3、592-2、593-5、594-3において、福岡県福岡県土整備事務所より平成29年３月14日に県道福岡東環状線拡幅工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。

当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋鏡遺跡隣接しているため、同年３月27日～30日に試掘調査を実施したところ、古墳時代から奈良時代にかけての土坑等の遺構を検出した。この調査結果に基づき協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査実施後に工事を着手することとなった。発掘調査は平成31年４月22日～令和元年12月27日、発掘調査報告書作成に係る遺物整理作業は令和２年４月１日～令和３年３月31日の期間において実施した。出土遺物および図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の方々をはじめ、関係者の皆様には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

令和元年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村 久朝
社会教育課長　新宅 信久
同課文化財係主幹
西垣 彰博（調査担当）
同課同係主任主事　髙橋 幸作
同課同係嘱託職員　福島日出海（調査担当）、朝原泰介（調査担当）

令和２年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村久朝
社会教育課長　新宅信久
同課文化財係主幹
西垣彰博（報告書担当）
同課同係主任主事　髙橋幸作
同課同係会計年度任用職員
福島日出海、朝原泰介、毛利須寿代、松永メイ子、上田津由美、常盤拓生、水上良行、山下真美、岡部有貴

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地勢である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く、平坦な地勢の潮に沖積地は河川流域に限られている。

内橋柚ノ木遺跡第2地点が位置する博多湾沿岸は、多々良川・須恵川・宇美川が同口付近で合流し、古代においては入江状の内海を形成していた。遺跡はこの内海に近く、海上・河川交通の集中する地域に立地している。

歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡来系稲作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の土井遺跡群（福岡市）、多々良大牟田遺跡群（福岡市）では青銅器鋳型が出土している。粕屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製勘先、戸原鹿田遺跡で銅鏃、阿恵古屋敷遺跡では銅矛中子が出土している。青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると多々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳（福岡市）が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れるが、後期になると推定全長75mほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石屋形が安置されていることをはじめ、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者といわれる東光寺剣塚古墳（福岡市）と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

また、戸原寺田遺跡では、6世紀後半から7世紀前半の鍛冶関連遺構のほか、紡いだ糸を巻き取る様（かせ）の腕木が出土するなど、手工業に関わる集落が確認されていて、それに隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も見つかっている。ミヤケの時代の拠点的な集落の状況も明らかになりつつある。

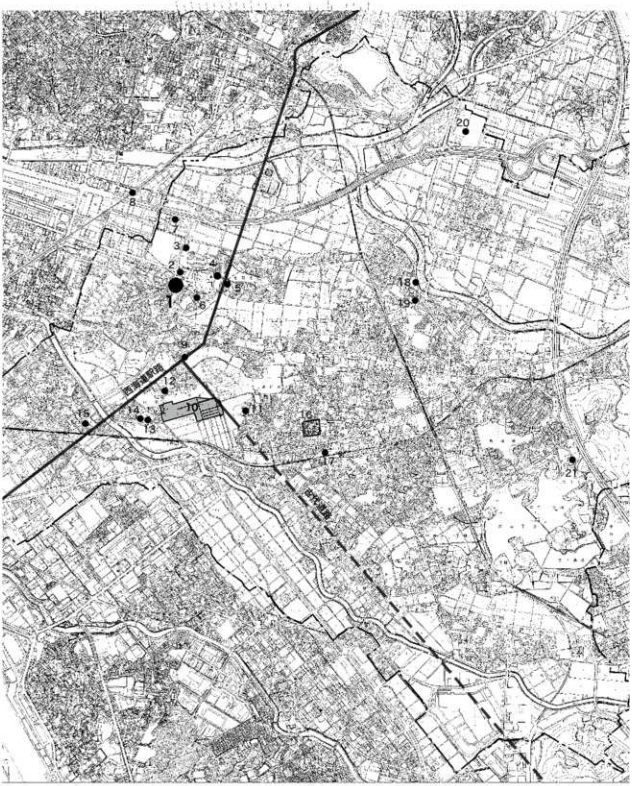
粕屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、須恵川下流域の阿恵官衙遺跡で糟屋評衙・郡衙が発見され国史跡に指定されている。

阿恵官衙遺跡は、7世紀後半から8世紀後半にかけて、政庁と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評衙の出現から郡衙の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により、評造名が判明している。まさに、阿恵官衙遺跡の政庁において「春米連廣國」が評造として政務をおこなっていたことが特定された。

8世紀前半に阿恵官衙遺跡の政庁が移転した後（正倉は8世紀後半まで残る）、郡衙の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上にある阿恵原口遺跡は、阿恵官衙遺跡の政庁と同じ方位の官衙建物が直交に配置されている。周辺にも官衙建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衙遺跡の東方約0.9kmの地点に1町四方の区画があり、『筑前国続風土記拾遺』では「長者の屋敷跡」と記されている。遺構は確認できていないが、区画の方位が阿恵官衙遺跡の政庁と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約100mにある原町平原遺跡では、大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位をとり、阿恵官衙遺跡の正倉群と同じであることから、8世紀後半の郡衙関連施設である可能性が高い。

また、阿恵官衙遺跡は官道が交差する衢（ちまた）に立地することが明らで、そのうちの駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と囲繞施設をともなうことから、駅家（うまや）（冷守駅（ひやもり））の可能性が高いと考えられる。

粕屋町周辺は、郡衙、駅家、官道、港、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域である。



駅路推定線は、日野尚志「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」『那珂38』福岡市教育委員会2005を参考とした。

1、内橋柚ノ木遺跡　2、内橋鏡遺跡　3、内橋カラヤ遺跡　4、内橋坪見遺跡　5、内橋牛切遺跡　6、内橋登り上り遺跡　7、戸原鹿田遺跡　8、多々良込田遺跡　9、阿恵茶屋遺跡　10、阿恵官衙遺跡（国史跡）　11、鶴見塚古墳　12、阿恵原口遺跡　13、阿恵天神森遺跡　14、阿恵古屋敷遺跡　15、「日守」地名　16、長者の屋敷跡推定地　17、原町平原遺跡　18、戸原寺田遺跡　19、戸原御堂の原遺跡　20、江辻遺跡第６地点　21、冨興丁廃寺

図2　内橋柚ノ木遺跡第２地点周辺図（1/2,500）

調査成果

包含層出土有溝把手付土器と甕の把手

調査成果

調査地は、舌状に派生する微高地の谷の肩部に位置する。隣接する内橋鏡遺跡３次で新羅土器が出土しており、今回の調査では朝鮮半島系遺物の有溝把手付土器が５点出土するなど渡来系集団の存在が想定される。

遺跡の概要

調査地は、舌状に派生する低丘陵の谷の肩部に位置する。谷は調査区中央付近から南西に向けて緩く落ちている。旧地形は北側が高くなるが、後世の開削によって平坦に削られているため、調査区北側は遺構が消失している。

出土遺物では、隣接する内橋鏡遺跡３次で新羅土器が出土し、今回の調査においては朝鮮半島系遺物の甑の有溝把手付土器が５点出土した。その他に大型釣針、大型土錘、馬歯等も出土し、保存食生産や馬匹管理を行っていた可能性も考えられ、そのような技術を擁した渡来系集団の存在が想定される。

遺構としては、７世紀代の大型の井戸と石敷遺構を検出したほか、近隣の内橋坪見遺跡で見つかった官衙の造営に関連する製炭土坑を本調査においても確認している。

図３　内橋柚ノ木敷遺跡第２地点周辺図（1/1,000）

掘立柱建物

SB1（図6）

調査区の南に位置し、梁行２間（3.0 m）、桁行２間（3.2 m）の

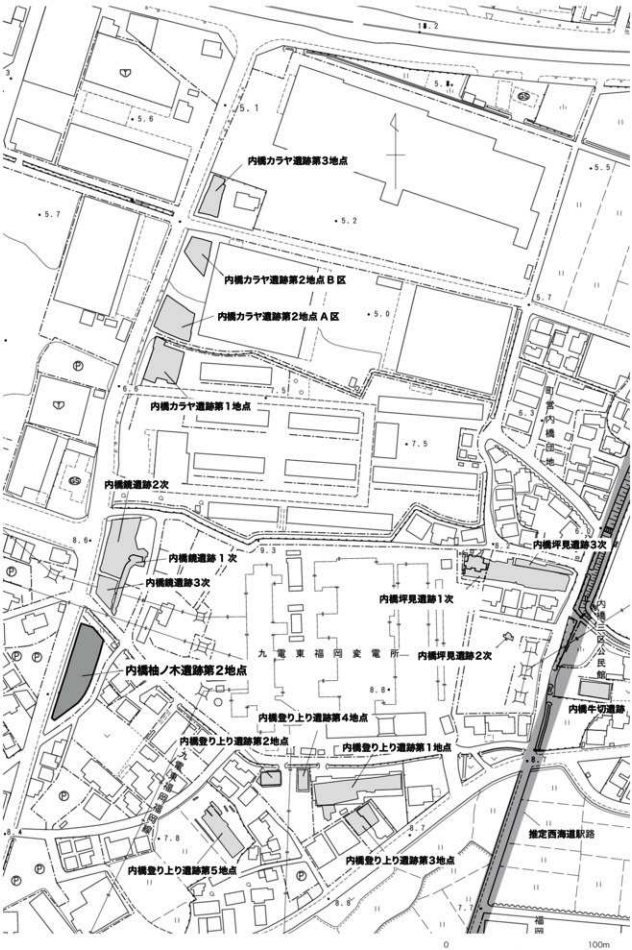


図4　調査地周辺図(1/2,500)

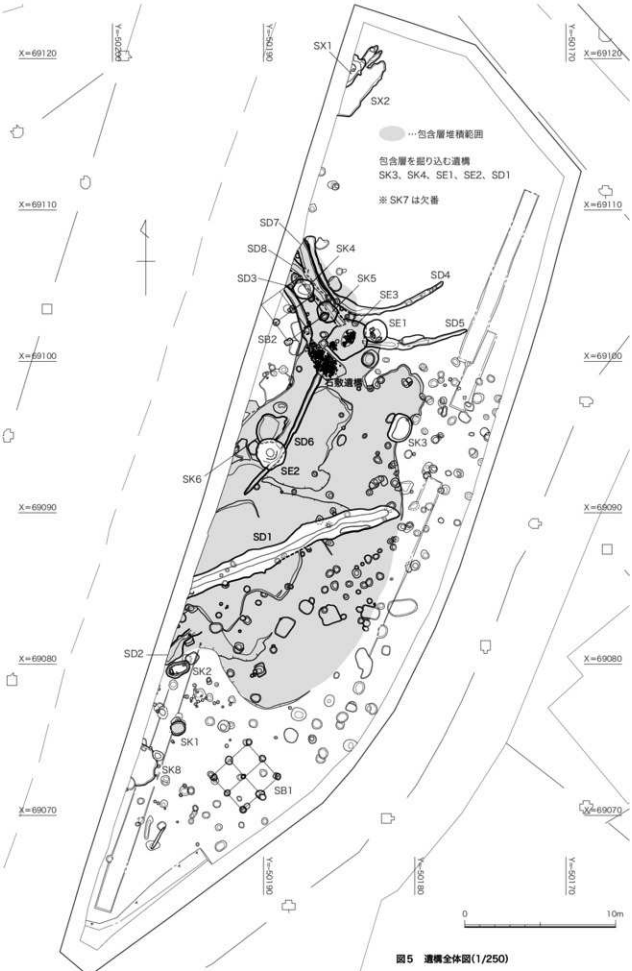


図5　遺構全体図(1/250)

総柱建物で、建物主軸方位はN−47.6°−E、建物面積は9.6㎡を測る。柱掘方の平面形状は円形で、直径40㎝〜50㎝、深さ35㎝程度。出土遺物はない。

SB2（図7）

調査区の北に位置し、SK5を切り、SK4、SD3に切られる。調査区外へ伸びるため全体像は不明である。梁行2間（3ｍ）、桁行2＋α（3＋αｍ）の総柱建物で、建物主軸方位はN−36.2°−W、建物建築面積は9＋α㎡。柱掘方の平面形状は円形と隅丸方形で、長軸50㎝前後、短軸40㎝〜50㎝、深さ30㎝〜70㎝を測る。

出土遺物より、牛頸編年Ⅳ B期に該当する。後述する井戸（SE3）、石敷遺構、溝（SD6）と同時期であり、これらの遺構で構成される水場に附属する建物の可能性も考えられる。

SB2 出土遺物（図9）

1は須恵器の短頸壺の蓋。撮みが付くとみられる。天井部は器壁が厚く、外面を回転ヘラケズリ。口径11.1㎝、かえり径9.8㎝。2は須恵器の杯身。3は須恵器の壺。4は土師器の甕。5はSB2に切られるピット出土の須恵器の高杯。杯部の底部にカキメを施す。口径13.0㎝。牛頸編年Ⅳ A期。

土坑

SK1（図8）

調査区の南に位置する円形に近い隅丸方形の製炭土坑である。床面に屑状の炭が厚さ2㎝〜7㎝堆積している。北側の壁面は被熱による硬化がみられ、その外縁5㎝程の範囲は暗赤褐色に変色している。硬化及び被熱による変色は壁面のみで床面には認められない。長軸1.0ｍ、短軸0.9ｍ、深さ15㎝である。

SK1 出土遺物（図10）

1は須恵器の杯身の口縁部。2は須恵器の壺の肩部。外面にカキメを施す。

SK2（図11）

SK1の北に位置する木棺墓である。堀方の平面形は隅丸長方形で、長軸1.6ｍ、短軸0.85ｍ〜1.0ｍ、深さ35㎝程である。短

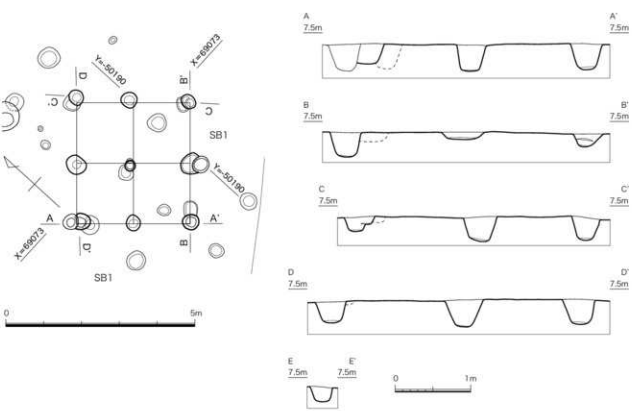


図6　SB1 平面図（1/100）、断面図（1/50）

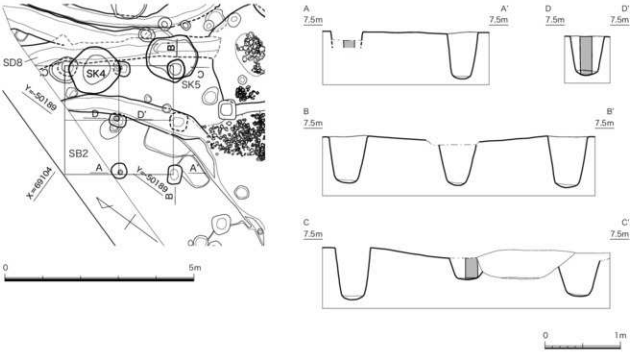
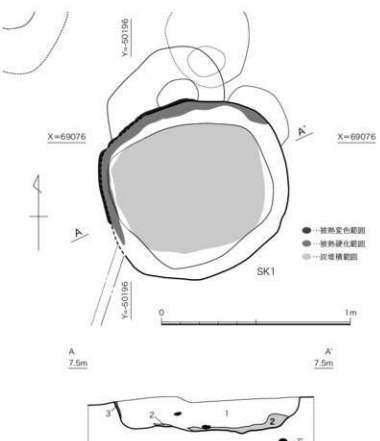


図7　SB2 平面図（1/100）、断面図（1/50）



1．黄褐色土（2.5Y5/3）に炭と明黄褐色土ブロック（10YR6/6）が少量混ざる
2．炭
3．被熱による硬化。橙色（7.5YR7/6）

図8　SK1 平面図、断面図（1/20）

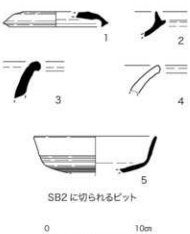
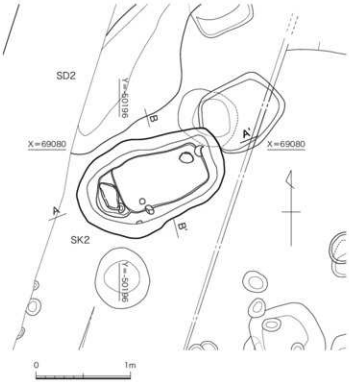
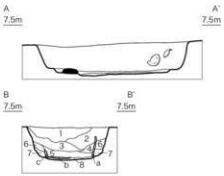


図9　SB2 出土遺物実測図（1/4）

図10　SK1 出土遺物実測図（1/4）





【木蓋の崩落により落ち込んだ土】
1．黄灰色土（2.5Y5/1）と黄褐色土（2.5Y5/3）に粒状の暗灰黄色土（2.5Y4/2）と明黄褐色土（10YR6/6）がマダラ状に混ざる
2．黄灰色土（2.5Y5/1）に明黄褐色土（10YR6/6）が多く混じる。粒状の暗灰黄色土（2.5Y4/2）が混ざる。
3．にぶい黄褐色土（10YR6/4）に明黄褐色土（10YR6/6）がブロック状に混ざる。
4．明黄褐色土（10YR6/6）に暗灰黄色土（2.5Y5/2）が混ざる。
5．にぶい黄褐色土（10YR5/3）に明黄褐色土（2.5Y6/8）が混ざる。
【木棺の裏込め】
6．暗灰黄色土（2.5Y5/2）に明黄褐色土（10YR6/6）が混ざる
7．暗灰黄色土（2.5Y5/2）に明黄褐色土（10YR6/6）が少量混ざる
【木棺の下部】
8．明黄褐色粘土（10YR7/6）
【木棺】
a．褐灰色土（10YR4/1）に灰黄褐色土（10YR4/2）が混ざる
b．褐灰色土（10YR4/1）に明黄褐色土（10YR6/6）が少量混ざる
c．褐灰色土（10YR4/1）

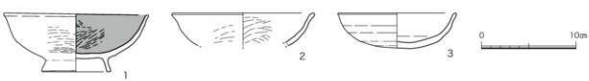


図 11　SK2 平面図、断面図（1/40）、出土遺物実測図（1/4）

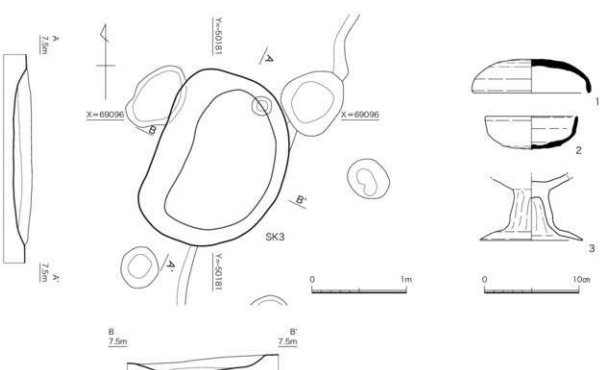
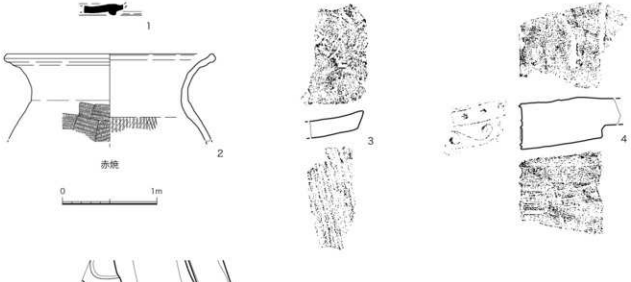
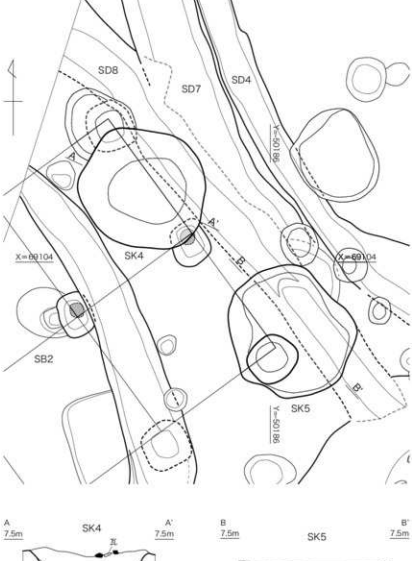
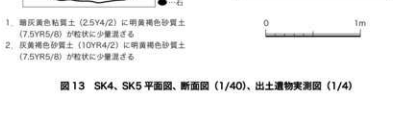


図 12　SK3 平面図、断面図（1/40）、出土遺物実測図（1/4）







1．暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）に明黄褐色砂質土（7.5YR5/8）が粒状に少量混ざる
2．灰黄褐色砂質土（10YR4/2）に明黄褐色砂質土（7.5YR5/8）が粒状に少量混ざる

図13　SK4、SK5 平面図、断面図（1/40）、出土遺物実測図（1/4）

軸側の土層断面の観察から、木棺幅は52㎝、棺材の厚さは2㎝である。棺材が置かれていたとみられる床面の部分は深さ5㎝程掘りくぼめられている。床面の西側には枕石が置かれている。出土遺物から10世紀後半とみれられる。

SK2 出土遺物（図11）

いずれも副葬品である。**1**は内黒土器の椀。口縁部がわずかに外反し、体部は丸みをもつ。内外面はヘラミガキ、底部外面はヘラ切り後ナデで板目が残る。口径15.4㎝、器高6.2㎝、高台径7.3㎝。**2**は土師器の椀で口縁部は外反し、内外面ヘラミガキ。口径15.2㎝。**3**は土師器の杯。底部外面は回転ヘラケズリで、それ以外はナデ。口縁部が小さく外反し、体部は丸みをもつ。口径12.8㎝、器高3.8㎝。

SK3（図12）

調査区の中央に位置する。包含層が堆積している途中もしくは堆積した後に掘削された土坑とみられるが、包含層が薄い部分に位置しているため、どちらになるのか

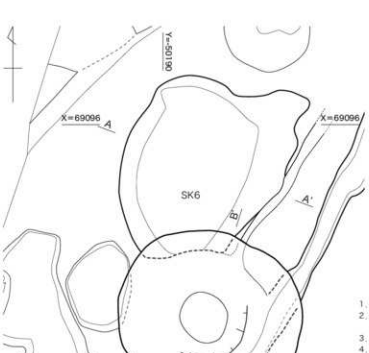


図 14　SK6、SE2 平面図、断面図（1/40）

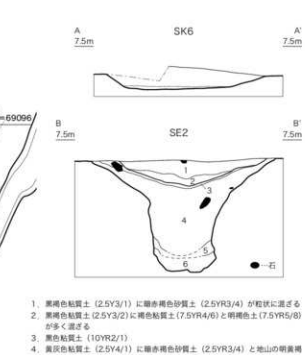


図 15　SK6 出土遺物実測図（1/4）

明確には判断できなかった。堀方の平面形は楕円で、断面は浅い皿状になる。長軸 1.8 m、短軸 1.4 m、深さ 20㎝程を測る。出土遺物から牛頸編年Ⅴ期以降。

SK3 出土遺物（図 12）

1 は須恵器の杯蓋で、天井部は回転ヘラケズリ。口径 12.2㎝、器高 3.6㎝。灰赤色を呈する。牛頸編年ⅣB 期。**2** は須恵器の杯身。底部は回転ヘラケズリ。口径 9.8㎝、器高 3.6㎝。牛頸編年Ⅴ期。**3** は土師器の高杯。脚部外面はヘラナデ、内面はヘラケズリ。底径 10.8㎝。

SK4（図 13）

調査区の北に位置し、SB2 と SD8 を切る円形の土坑である。長軸 1.4 m、短軸 1.3 m、深さ 46㎝を測る。出土遺物より 8 世紀後半。

SK4 出土遺物（図 13）

1 は須恵器の高台付杯で、高台は低く丸みをもつ。**2** は赤焼土器の甕。外面に平行タタキ、内面に当て具痕が残る。口縁部は強いヨコナデで凹線状にくぼむ。口径 22.4㎝。**3** は平瓦。凸面は縄目タタキで、凹面に布目が残る。**4** は軒平瓦で、大宰府分類の 642 型式（『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000）である。これは近隣に位置し、夷守駅家の可能性が考えられる内橋坪見遺跡をはじめ、阿恵官衙遺跡（槽屋郡衙）、多々良込田

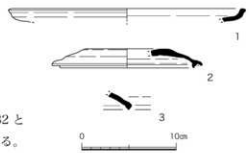


図 16　SE2 出土遺物実測図（1/4）

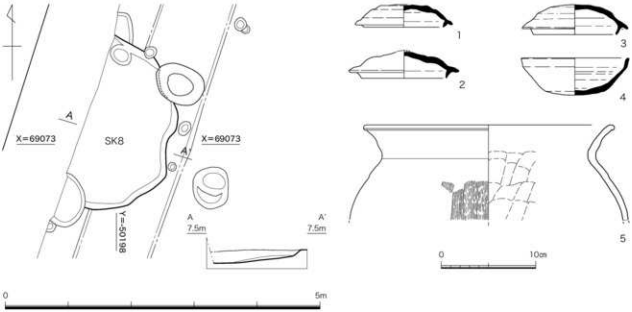


図17　SK8平面図、断面図（1/60）、出土遺物実測図（1/4）

遺跡（港湾施設）、海の中道遺跡（津厨か）など、糟屋郡域の官衙に特徴的にみられる型式である。凹面は模骨痕と布目が残り、凸面はヘラケズリ。

SK5（図13）

SK4の南東側に位置する楕円形の土坑で、SB2に切られ、SD8を切る。堀方は長軸1.4 m、短軸1.2 m、深さ16㎝を測る。出土遺物は細片のみで図示し得ない。

SK6（図14）

調査区の中央付近に位置し、SE2に切られる楕円形の土坑である。他の遺構に破壊されて残りは悪い。長軸2.0 m、短軸1.7 m、深さ24㎝を測る。出土遺物から牛頸編年Ⅳ B 期。

SK6出土遺物（図15）

1は須恵器の杯蓋。2は赤焼土器の甕。強いヨコナデで凹線状にくぼむ。3は土師器の高杯。器壁は薄い。焼成不良で軟質のため調整不明。

SK7（欠番）

SK8（図17）

調査区の南に位置する円形の土坑で、西半分は調査区外にある。調査当初は竪穴建物の可能性を考えたが、床面が傾斜することと主柱穴がみられないことから土坑と判断した。特に、SK6とSK8のように平面形が円形～不定形で、断面が皿状を呈する土坑は、隣接する内橋鏡遺跡、内橋登り上り遺跡で検出されている廃棄土坑と同様のものとみられる。直径2.7 m前後、深さ42㎝。出土遺物から牛頸編年Ⅴ期。

SK8出土遺物（図17）

1～3は須恵器の杯蓋。1は口径10.4㎝、かえり径8.4㎝、器高2.4㎝。天井部はヘラ切り後未調整。2は口径11.6㎝、かえり径9.0㎝、器高2.9㎝。天井部はヘラ切り後ナデ。3は口径11.2㎝、かえり径8.7㎝、器高3.2㎝。天井部は回転ヘラケズリ。4は須恵器の杯身。底部はヘラ切り後ナデ。口径11.4㎝、器高4.0㎝。5は土師器の甕で、外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。口径26.6㎝。

井戸

SE1（図19）

調査区の北に位置し、SE3、SD5を切る楕円形の素掘りの井戸である。堀方は、長軸2.05 m、短軸1.7 m、深さ0.86 mを測る。底付近には石がまとまって遺棄されている。

包含層堆積後に掘削された井戸で、8世紀後半に埋没している。

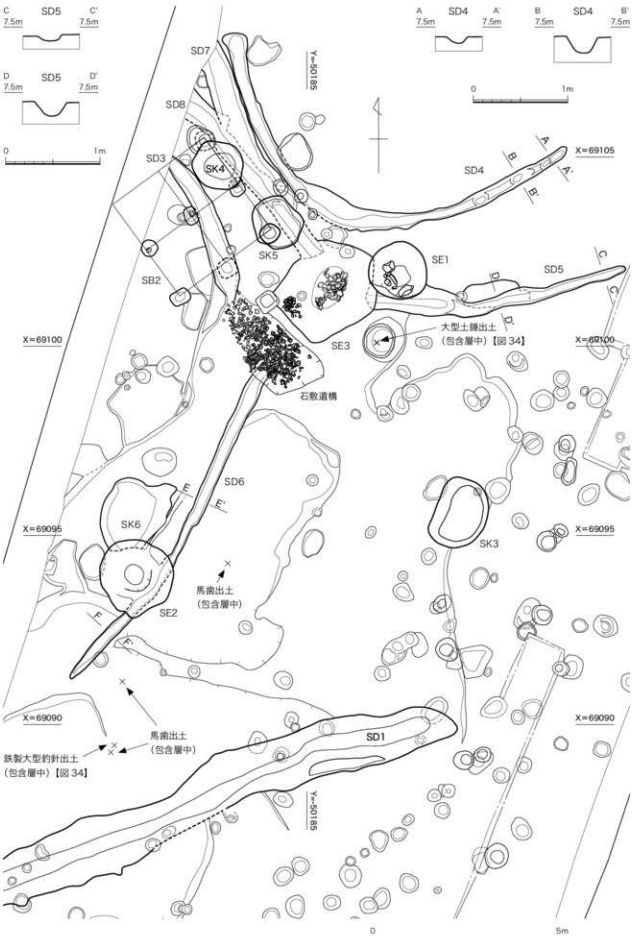


図 18　石敷遺構周辺平面図（1/100）、SD4、SD5 断面図（1/40）

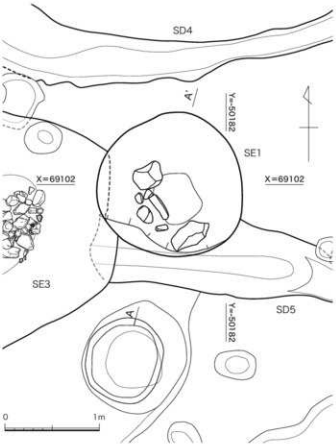
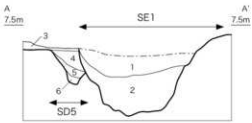


図19　SE1、SD5平面図、断面図(1/40)



1．暗褐色土（10YR3/3）
2．褐色粘質土（7.5YR4/3）
3．灰黄褐色土（10YR5/2）　包含層
4．暗褐色粘質土（10YR3/4）
5．暗褐色粘質土（10YR3/3）
6．5に地山の明黄褐色砂礫（10YR6/8）が多く混じる

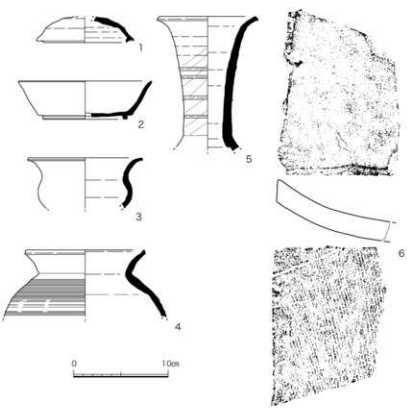


図20　SE1 出土遺物実測図 (1/4)

SE1 出土遺物（図 20）

図示し得た遺物はすべて 1 層出土である。**1**～**5** は須恵器。**1** は杯蓋で天井部はヘラ切り後ナデ。口径 10.4㎝、かえり径 8.2㎝、器高 2.7㎝。**2** は高台付杯身で底部の内側に方形の高台が付く。口縁部はやや外反する。口径 14.2㎝、器高 4.1㎝、高台径 9.0㎝。**3** は小型の壺。扁球状の体部で口縁部は大きく開く。口径 12.2㎝、胴部最大径 10.0㎝。**4** は壺か。体部はカキメを施し、胴部最大径部よりやや上に凹線状の沈線が 2 条まわる。体部内面はヨコナデ。色調は灰褐色で、胎土に白色微粒子を含む。色調・胎土ともに他の出土須恵器とは異なり、搬入品の可能性もある。**5** は長頸壺で、頸部に 4 条の沈線があり、口縁部はラッパ条に開く。口径 10.7㎝。**6** は平瓦で凹面は布目と糸切り痕、凸面は縄目タタキ。

SE2（図 14）

調査区の中央付近に位置し、包含層、SK6、SD6 を切る円形の素掘りの井戸である。堀方の検出面は直径 1.9 ～ 2.0 m で、中程から下方は直径 70㎝程になる。深さは 1.2 m である。薄く堆積する 3

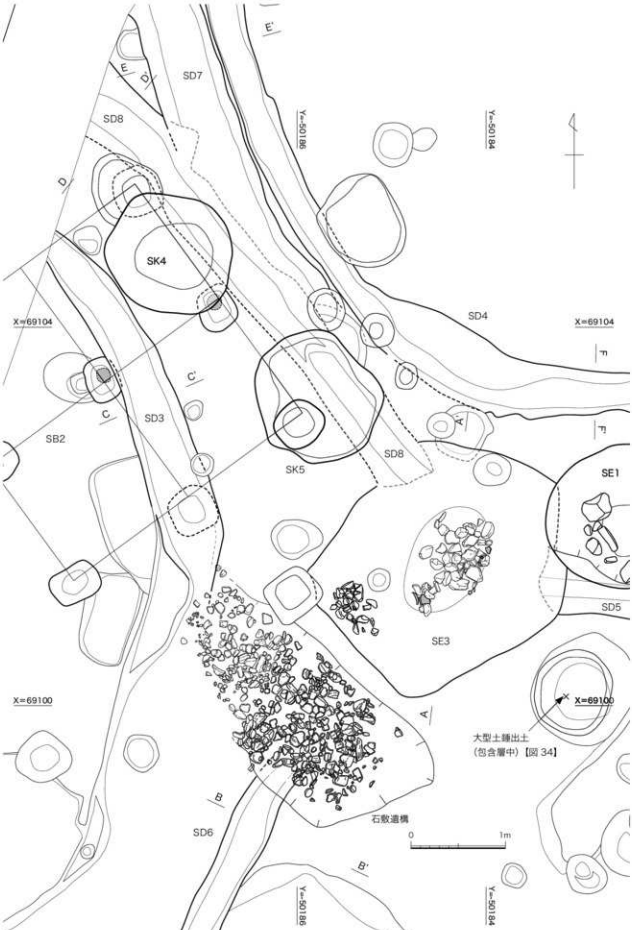


図 21　SE3、SK4、SK5、SD3、SD4、SD6、SD7、SD8、石敷遺構平面図 (1/40)

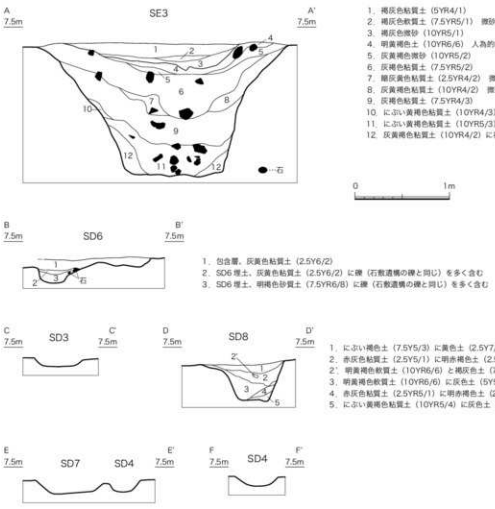


図 22　SE3、SD3、SD4、SD6、SD7、SD8 断面図（1/40）

層の黒色粘質土は、緩慢な堆積作用により腐食と有機物の集積が発生したことを示しており、1 層と 2 層を上層、3 層以下を下層として遺物を取り上げた。包含層を掘り込むことから、8 世紀以降とみられる。

SE2 出土遺物（図 16）

1 は下層出土の須恵器の高杯。口縁端部は外方に傾く。口径 23.2㎝。**2** は下層出土の須恵器杯蓋で内外面ともヨコナデ。口径 16.0㎝、かえり径 14.0㎝、器高 2.0㎝。**3** は上層出土の須恵器杯蓋で、端部を短く折り曲げる。

SE3（図 21、22）

調査区の北側に位置し、包含層中より検出した。SE1 に切られ、SD5 を切る。SD8 との切り合い関係は、遺構相互の覆土に違いが見出し難く不明瞭であるが、上層断面 A–A' に SD8 が現れていないことから SE3 が SD8 を切るものと思われる。

堀方の検出面は形の崩れた方形ともいうべき平面形を呈し、長軸 2.75 m、短軸 2.35 m、深さ 1.43 m を測る大型の素掘りの井戸である。出土遺物からみて牛頸編年Ⅳ B 期のもので、石敷遺構、SD6 と同時期であり、これらは互いに関連性をもつ遺構と考えられる。

SE3 出土遺物（図 23）

井戸底に近い下層（11 層・12 層）、中位の中層（5 層～ 10 層）、人為的に埋められた 4 層より上位の上層（1 層～ 4 層）に分けて報告する。下層と中層が牛頸編年Ⅳ B 期、上層がⅤ期に相当する。

SE3 下層出土遺物

1 は 11 層出土の須恵器の杯蓋。天井部はヘラ切り後未調整。口径 12.0㎝、器高 4.1㎝。色調は橙色で土師器に近似するが、焼成と成形技法は須恵器のもの。後述の **6** も同様の特徴がある。**2** は 11 層出土の須恵器の脚付短頸壺。体部下半は回転ヘラケズリで、上半は

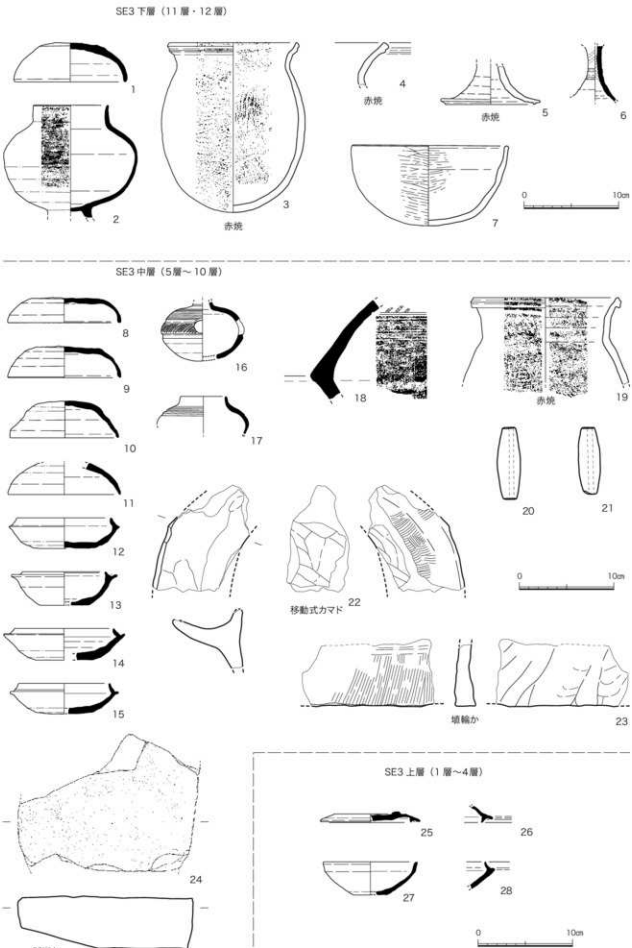


図 23　SE3 出土遺物実測図（1/4）

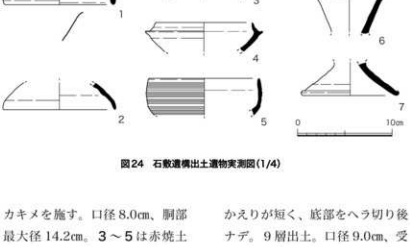


図24　石敷遺構出土遺物実測図(1/4)

図25　SD6出土遺物実測図(1/4)

カキメを施す。口径8.0cm、胴部最大径14.2cm。**3**～**5**は赤焼土器。**3**は甕で12層出土。口縁部は沈線状にくぼむ。外面は平行タタキで、内面に当て具痕が残る。口径14.0cm、器高18.0cm、胴部最大径15.2cm。**4**は12層出土の甕の口縁部。**5**は12層出土の高杯の脚部で、内外面ナデ。底径10.5cm。**6**は須恵器の小型の高杯の脚部。11層出土。1と同様に、色調は橙色で土師器に似る。内外面にしぼり目が見られる。**7**は土師器の杯で、内外面にヘラミガキを施す。11層出土。口径16.6cm、器高8.6cm。

SE3中層出土遺物

8～**11**は須恵器の杯蓋。**8**は扁平で体部は内湾する。天井部はヘラ切り後ナデ。9層出土。口径12.0cm、器高2.7cm。**9**は口縁端部がやや厚く、天井部ヘラ切り後ナデ。7層出土。口径12.0cm、器高3.4cm。**10**は天井部を回転ヘラケズリ。7層出土。口径11.5cm、器高3.9cm。**11**は体部が丸みをもち、天井部を回転ヘラケズリ。6層出土。口径12.0cm。

12～**15**は須恵器の杯身。**12**は底部の一部のみに回転ヘラケズリ。9層出土。口径10.0cm、受部径11.6cm、器高3.3cm。**13**はかえりが短く、底部をヘラ切り後ナデ。9層出土。口径9.0cm、受部径11.2cm、器高3.6cm。**14**はやや厚手で、底部は回転ヘラケズリ。6層出土。口径10.5cm、受部径12.8cm、器高3.3cm。**15**は6層出土で、口径9.7cm、受部径11.5cm、器高3.3cm。

16は須恵器の甕で7層出土。体部は扁平で、回転ヘラケズリ、中央に櫛状工具による刺突文を施し、上半はカキメ。胴部最大径8.8cm。**17**は6層出土の須恵器の短頸壺。肩部に2条の沈線があり、頸部との間はカキメ。口径5.0cm。**18**は7層出土の須恵器の甕。頸部に浅い線刻がある。

19は6層出土の赤焼土器の甕で、外面は平行タタキ。口径15.2cm。**20**と**21**は6層出土の土錘。**20**は全長7.7cm、幅2.5cm、孔径0.6cm。**21**は全長7.1cm、幅2.3cm、孔径0.5cm。**22**は6層出土の移動式カマド。焚口の内面はヘラケズリで、庇の内面はナデ、外面はハケメとナデ。**23**は円筒埴輪の底部か。外面は荒いタテハケで、内面は指ナデ。外面上部の横位のナデはタガの下部か。端部は平坦で破片の状態でも自立する。6層出土。**24**は玄武岩製の凹石か。前面に敲打痕があり、一部に穴状のくぼみがみられる。残長14.5cm、幅18.5cm、厚5.8cm。6層出土。

SE3上層出土遺物

図示したものは、すべて須恵器である。**25**と**26**は杯蓋。**25**は1層出土で、天井部はヘラ切り後未調整。全体に歪みがあり、焼成時に別個体の胎土も癒着している。口径10.6cm、かえり径8.6cm、器高0.9cm。**26**は2層出土。**27**と**28**は杯身。**27**は3層出土で、底部はヘラ切り後未調整。口径10.0cm、器高3.5cm。**28**は3層出土。

石敷遺構(図21)

SE3の南西に位置し、全長約2.8m×幅約1.3mの範囲に数cm～十数cm程の河原石を敷いた石敷遺構である。SE3と同様に包含層中より検出し、出土遺物をみても牛頸編年Ⅳ B期でSE3と同時期である。石敷遺構の石の隙間には明褐色砂質土(7.5YR6/8)が堆積していて、この砂質土は石敷遺構と後述のSD6のみに認められるものである。SE3で水を汲み、石敷遺構は何らかの洗い場として使用されたもので、SD6が排水溝と推測する。

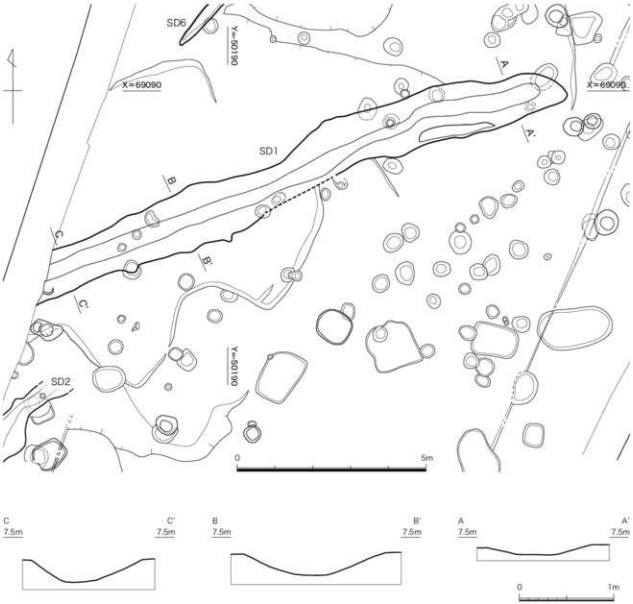


図26 SD1 平面図（1/100）、断面図（1/40）

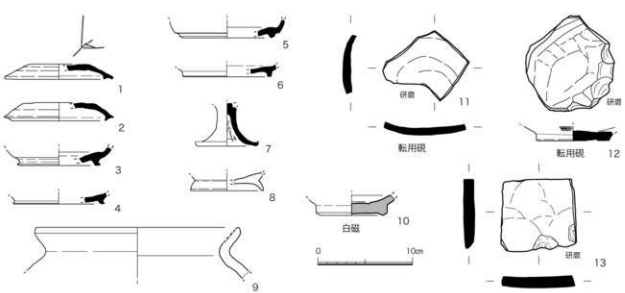


図27 SD1 出土遺物実測図（1/4）

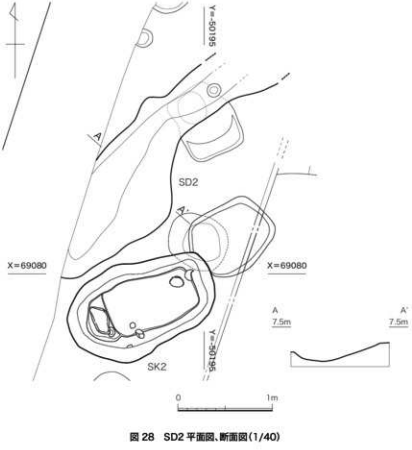


図 28　SD2 平面図、断面図(1/40)

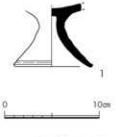


図 29　SD4 出土遺物実測図 (1/4)

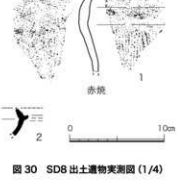


図 30　SD8 出土遺物実測図 (1/4)

石敷遺構出土遺物（図 24）

図示し得たものはすべて須恵器である。1と2は杯蓋で、1は天井部ヘラ切り後ナデ、口径 11.6㎝、器高 3.5㎝。内面にヘラ記号を有する。2は口径 12.0㎝。3と4は杯身。3は口径 10.0㎝、受部径 12.0㎝。4は口径 10.2㎝、受部径 12.4㎝。5は椀で、3条の凹線条の沈線とカキメを施す。口径 11.6㎝。6は提瓶か横瓶の口縁部。口径 8.0㎝。7は高杯の脚部で底径 10.4㎝。

溝

SD1（図 26）

調査区の中央に位置し、西へ流れる。SD1 付近は低丘陵が枝分かれして谷が始まる箇所にあたる。周囲から水が集まる場所でもあり、包含層の堆積もこの付近を中心としている。SD1 は谷に包含層が堆積したあとに開削されたものである。溝の幅は 1.1 m～1.6 mで、深さは最深部で 24㎝である。

SD1 出土遺物（図 27）

包含層と遺構埋土の区別が判断しがたい箇所もあったため、出土遺物のなかには包含層に伴うものも含まれている可能性がある。

1、2は須恵器の杯蓋。1は口径 11.5㎝、かえり径 9.4㎝、器高 1.7㎝。天井部にヘラ記号をもつ。2は口径 11.5㎝、かえり径 9.8㎝、器高 2.0㎝。3～6は須恵器の高台付杯身。3、4は高台が外方向に踏ん張る。3は高台径 8.8㎝。4は高台径 9.6㎝。5は断面台形の高台が底部のやや内側に付く。高台径 9.4㎝。6は小さな方形の高台。高台径 9.4㎝。7は須恵器の高杯。底径 6.3㎝。

8は土師器の椀で、高台径 7.6㎝。9世紀末以降。9は土師器の甕で口径 21.4㎝。10は白磁椀。施釉は内面のみ。底部は器壁が厚く、浅い削り出し高台。高台径 6.7㎝。大宰府陶磁器分類Ⅳ－1 b、11 世紀後半～ 12 世紀。

11 ～ 13は須恵器の転用硯。11は杯蓋で、内面に研磨痕。12は壺の底部で、高台を打ち欠いて改良している。内面に研磨痕。高台径 7.5㎝。13は甕の体部で方形に整えている。内面に研磨痕。

SD2（図 28）

SD1 の南に位置し、谷へ向かっ

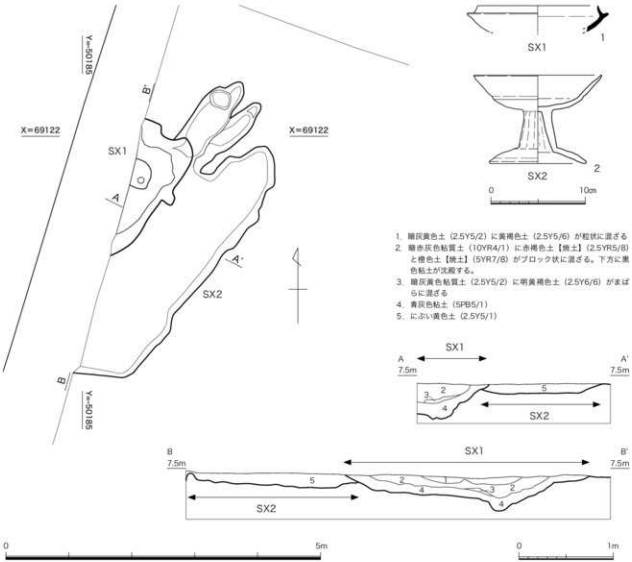


図31　SX1、SX2平面図（1/60）、断面図（1/40）、出土遺物実測図（1/4）

て北東側に流れる溝であるが、包含層の堆積する付近で不明瞭になる。溝幅0.4 m～1.0 m、深さ20㎝である。出土遺物はない。

SD3（図21）

調査区北側の西壁付近に位置し、北から南に流れる溝で、石敷遺構付近で不明瞭となる。SB1を切る。溝幅35㎝～70㎝、深さ10㎝と浅く狭い。出土遺物はない。

SD4（図18、21、22）

調査区の北に位置し、半円を描く溝である。底の一部にはピット状の掘り込みがあり、隣接する内橋鏡遺跡1次、2次調査において検出した溝と同類のものである。溝幅35㎝～72㎝、深さ8㎝～18㎝。本来は円弧を描くように掘られていたとみられるが、北半分は削平によって消失している。

SD4出土遺物（図29）

1は須恵器の高杯で底径8.0㎝。端部は雑なつくりで牛頭編年ⅣB期～Ⅴ期相当。

SD5（図18、19）

SD4の南に位置する。SE1に切られ、それより西側は不明である。SD7かSD8と一連のものとみられるがどちらと接続するか判断できない。弧を描くようにもみえることからSD4と同じ性格も考えられる。溝幅22㎝～77㎝、深さ6㎝～16㎝。出土遺物は細片のみで図示し得ない。

SD6（図 18、21、22）

石敷遺構の石の下から南西方向の低丘陵の谷に向けて伸びる排水溝と考えられる。石敷遺構と同じ明褐色砂質土（7.5YR6/8）で埋まっている。溝幅 16㎝～ 40㎝、深さ 11㎝で、堀方断面は方形。出土遺物から牛頸編年Ⅳ B 期で、SE3、石敷遺構と同時期である。

SD6 出土遺物（図 25）

1 は須恵器杯蓋で天井部の回転ヘラケズリは粗略。ヘラ記号をもつ。口径 12.0㎝、器高 3.6㎝。2 は須恵器の杯身。

SD7（図 18、21、22）

SD4 と SD8 の間に位置し、SD8 に切られる。北西–南東方向の方位を向くが、残りが悪く全体像が把握しがたい。SD5 と接続するか不明である。溝幅 70㎝前後、深さ 12㎝。出土遺物は細片のみで図示し得ない。

SD8（図 18、21、22）

調査区中央付近に位置し、SB1、SK4、SK5、SD7 に切られる。付近の遺構の切り合い関係において最も古い遺構である。なお、SD5 と接続するか不明である。北西側は調査区外へ伸びる。溝幅 70㎝前後、深さ 43㎝で、堀方の断面は方形である。

SD8 出土遺物（図 30）

1 は赤焼土器の甕。口縁端部を欠くが肥厚して段になるとみられる。頸部は粘土の継ぎ目が沈線条の段になる。体部外面はタタキで内面に当て具痕が残る。2 は須恵器の杯身または有蓋高杯の杯部。立ち上がりは 1 ㎝程で、付け根が厚い。牛頸編年Ⅳ A 期頃か。

不定形遺構

SX1（図 31）

調査区の北側で検出した不定形の遺構で、SX2 を切る。長軸 2.2 m、短軸 0.8 m、深さ 20㎝の堀方をもち、床面の一部に径 40㎝、深さ 12㎝程のピット状の掘り込みがある。埋土の上層に焼土を多く含むが、全体像を把握できないこともあり、遺構の性格は判断がつかなかった。

SX1 出土遺物（図 31）

1 は須恵器の杯身。口径 12.2 ㎝、受部径 15.0㎝。牛頸編年Ⅳ A 期。

SX2（図 31）

SX1 に切られる不定形の遺構で、長軸 5.2 m、短軸 1.7 m、深さ 15㎝の断面皿状の堀方をもつ。本遺跡や隣接する内橋鏡遺跡で確認されている不定形の土坑と同様の廃棄土坑の可能性がある。

SX2 出土遺物（図 31）

2 は土師器の高杯。口径 13.6 ㎝、器高 9.4㎝、底径 10.2㎝。脚部の外面はヘラナデ、内面はヘラケズリ。それ以外はナデである。

包含層（図5）

調査区の中央付近が低丘陵の谷の肩部にあたり、谷は南西方向に傾斜する。この谷の部分に包含層が堆積していた。本遺跡の包含層は、北側に隣接する内橋鏡遺跡 3 次調査で検出した包含層と同一のものとみられる。内橋鏡遺跡 3 次調査地よりも本遺跡の標高が 1 m 程低いため、本来ならば本遺跡の大部分に包含層が堆積していたはずであるが、後世の削平によって谷部分にしか残っていないものと考えられる。

包含層は 7 世紀から 8 世紀前半ころまでの遺物を含む。包含層堆積中においても、SE3、石敷遺構、SD6 などの遺構がみられ、生活の場として利用されている。

包含層出土遺物（図 32 ～ 34）

数量が多く図示していないが、甑の把手が相当数出土している（図版参照）。粕屋町内の遺跡では最多であり、遺跡の性格を考える上で注意すべき要素である。また、図示していないが馬歯も包含層中から出土している。

1 ～ 38 は須恵器。1 ～ 12 は杯蓋。1 は天井部の一部に限定的に回転ヘラケズリを施す。大半はヘラ切り後ナデ。ヘラ記号をもつ。口径 11.0㎝、器高 3.0㎝。2 と 3 は宝珠摘み。3 は天井部を回転ヘラケズリ。口径 11.2㎝、かえり径 9.0㎝、器高 3.3㎝。4 は天井部をヘラ切り後ナデ。ヘラ記号をもつ。口径 11.3㎝、かえり径 9.3㎝、器高 3.3㎝。5 は天井部をヘラ切り後ナデ。口径 10.5㎝、かえり径 8.5㎝、器高 2.4㎝。6 は天井部を丁寧な手持ちヘラケズ

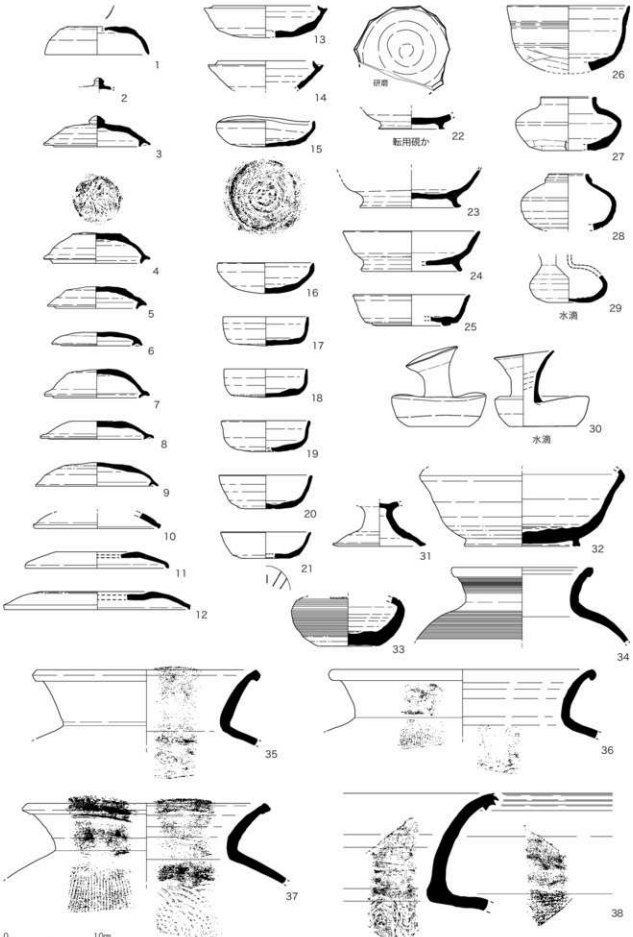


図32　包含層出土遺物実測図(1/4)

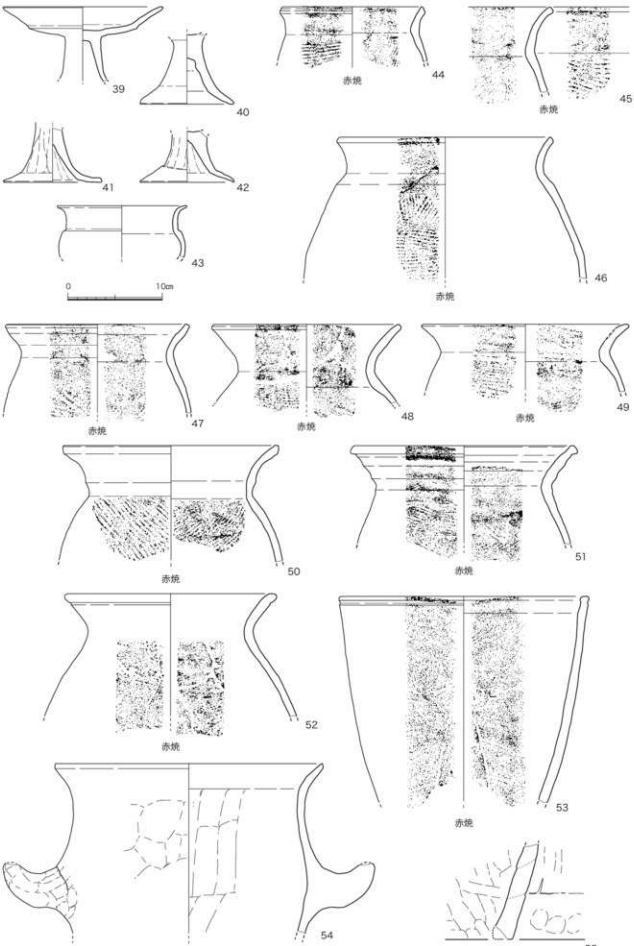


図33　包含層出土遺物実測図(1/4)

リ。口径 9.6㎝、かえり径 7.4㎝、器高 1.6㎝。7 は天井部をヘラ切り後ナデ。口径 11.2㎝、かえり径 9.1㎝、器高 3.1㎝。8 は天井部をヘラ切り後ナデ。口径 12.0㎝、かえり径 9.8㎝、器高 1.9㎝。9 は天井部を回転ヘラケズリ。口径 13.0㎝、かえり径 11.0㎝、器高 2.5㎝。10 は口縁部を短く折り返す。口径 13.5㎝。11 は天井部をヘラ切り後ナデ。口径 15.2㎝、器高 1.8㎝。12 は天井部の一部を回転ヘラケズリ、中心部はヘラ切り後ナデ。口径 19.2㎝、器高 1.9㎝。

13 ～ 21 は杯身。13 は底部を回転ヘラ切り後ナデ。口径 11.0㎝、受部径 13.0㎝、器高 3.3㎝。14 は口径 10.2㎝、受部径 12.2㎝。15 は底部をヘラ切り後ナデ。ヘラ記号をもつ。口径 10.2㎝、器高 3.3㎝。16 は底部をヘラ切り後ナデ。口径 10.1㎝、器高 3.2㎝。17 は底部を回転ヘラケズリ。口径 8.8㎝、器高 3.1㎝。18 は底部を回転ヘラケズリ。口径 8.7㎝、器高 3.1㎝。19 は底部をヘラ切り後ナデ。口径 9.2㎝、器高 3.6㎝。20 は底部をヘラ切り後ナデ。口径 9.7㎝、器高 3.6㎝。21 は底部をヘラ切り後ナデ。ヘラ記号をもつ。口径 9.6㎝、器高 2.8㎝。22 ～ 25 は高台付杯身。22 は内面を研磨し、周囲を打ち欠いている。転用硯の可能性がある。細く短い高台が付き、端部は外方へ踏ん張る。高台径 7.0㎝。23 は長い高台が付き、端部は外方へ踏ん張る。高台径 10.6㎝。24 は口径 14.4㎝、器高 4.3㎝、高台径 10.4㎝。25 は低い方形の高台が底部の内側に付く。底部は回転ヘラケズリ。口径 12.4㎝、器高 3.3㎝、高台径 8.3㎝。

26 は椀。底部は丁寧な手持ちヘラケズリ。体部に凹線状の沈線がまわる。口径 13.0㎝、器高 6.9㎝。27 と 28 は短頸壺。27 は底部を手持ちヘラケズリ。胴部に沈線状の段がつく。口径 6.0㎝、器高 5.7㎝、胴部最大径 11.2㎝。28 は底部を回転ヘラケズリ。型部に沈線状の段がつく。口径 4.3㎝、器高 6.1㎝、胴部最大径 10.1㎝。29 と 30 は水滴。29 は肩部より下位を回転ヘラケズリ。底径 4.3㎝。30 は底部をヘラ切り後ナデ。口径 6.0 ～ 6.4㎝、器高 7.3 ～ 8.0㎝、底径 7.1㎝、胴部最大径 10.0㎝、体部高 3.3㎝、頸部径 2.9㎝。色調は青灰色。31 は高杯の脚部。底径 8.6㎝。32 と 33 は長頸壺の胴部。32 は底部を回転ヘラケズリ。肩部が角張る。高台径 12.3㎝、胴部最大径 21.7㎝。33 は体部と底部の境を回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り後ナデ。胴部はカキメで、肩部に櫛状の刺突文を施す。底径 6.4㎝、胴部最大系 12.0㎝。

34 ～ 38 は甕。それぞれ外面にタタキ、内面に当て具痕が残る。34 は口縁下と肩部にカキメを施す。口径 14.9㎝。35 は口径 13.0㎝。36 は口径 27.4㎝。37 は口径 25.0㎝。38 は口縁部に鋭い突帯状の貼り付けを施す。色調は橙色～にぶい橙色で焼成は良好。周辺では出土例がない色調である。

39 ～ 42 は土師器の高杯。39 は体部で屈曲して口縁が大きく開く。口径 17.0㎝。調整不明。40 ～ 42 の脚部は外面をヘラナデ、内面をヘラケズリ。40 は底径 9.9㎝。41 は底径 10.8㎝。42 は底径 10.0㎝。43 は土師器の小型の甕。体部外面の調整不明。その他はナデ。口径 13.2㎝。

44 ～ 52 は赤焼土器の甕。本遺跡では土師器の甕はほとんど認められず、赤焼土器の甕が主体を占める。外面にタタキと内面に当て具痕を残し、口縁部は肥厚させるものや、強いヨコナデで凹線状の段がつくものなどがある。44 は口径 14.2㎝。46 は口径 22.4㎝。47 は口径 19.4㎝。48 は口径 20.0㎝。49 は口径 22.0㎝。50 は口径 22.8㎝。51 は口径 24.0㎝。52 は口径 22.4㎝。

53 は赤焼土器の甑。口縁部の内外が強いヨコナデで凹線状の段がつく。外面はタタキで、内面に当て具痕が残る。54 と 55 は土師器の甑。54 は外面はナデで、内面はヘラケズリ。口径 28.4㎝。55 は底部で、内面はユビナデ、外面は指オサエとハケメ。

56 ～ 60 は甑の有溝把手付土器で、朝鮮半島系の遺物。粕屋町内では初めての出土例であるにもかかわらず、1 遺跡で 5 点がまとまって出土した。福岡平野の出土例と比較して、切り込みというよりは、刺突を施しているような特徴がある。貫通しているのは 56 のみである。把手の整形を比べてみても、土師器の把手はナデによって平滑に仕上げられるのに対して、有溝把手付土器は指オサエに近いナデの跡が明瞭で稜線が付き、角張ったつくりになっている。また、把手の幅も細身である。

61 ～ 63 は土師器の移動式カマド。61 と 62 は庇の左側脚部。63 は底部で、外面はタタキ、内面はナデ。

64 は土師質の大型土錘。SE3、石敷遺構の近くで出土している（図 21）。ユビオサエとナデによる調整。色調は明赤褐色で焼成良好。残長 13.0㎝、最大幅 4.3㎝、孔径 1.3㎝、残重量 233g。

65 は丸瓦。凸面はタタキ、凹

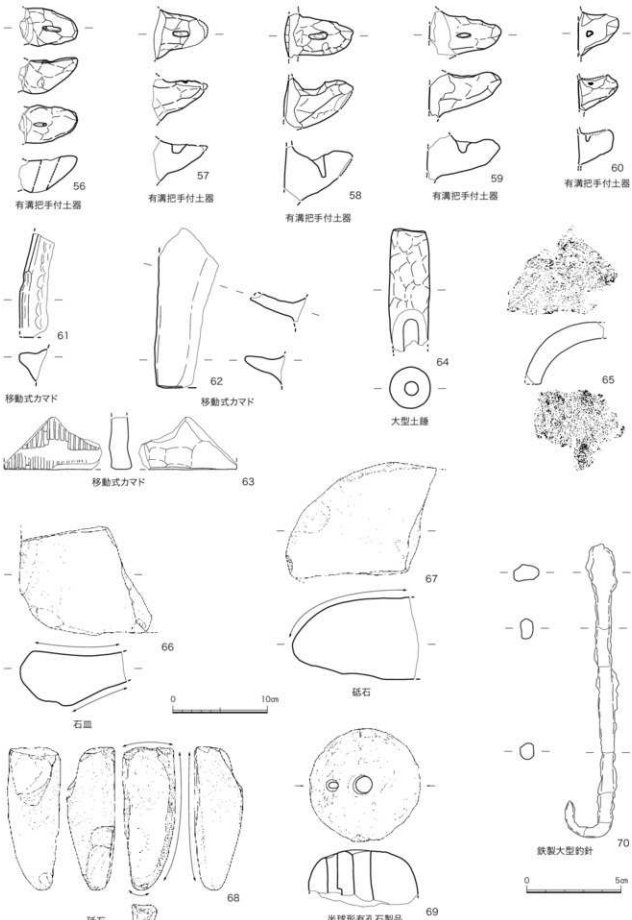


図 34　包含層出土遺物実測図（1/4、鉄製品 1/2）

面は布目が残る。

66 は砂岩製の石皿。残長 11.5 ㎝、残幅 14.0 ㎝、厚 5.2 ㎝。表裏に使用面がある。**67** は花崗岩系の砥石。残長 12.0 ㎝、残幅 14.0 ㎝、厚 8.7 ㎝。**68** は全面に敲打と研磨を施す。基部と先端付近が破損しており、敲いて使用した痕跡がある。最終的には、側面を砥石として使用したものか。全長 15.1 ㎝、幅 5.8 ㎝、厚 5.1 ㎝。**69** は半球形有孔石製品で、ケズリと研磨で調整する。孔は 2 か所あり、中央は径 2.0 ㎝で、上面から穿孔したもの。その横の孔は径 1.3 ㎝で、上下から穿孔している。径 11.6 ～ 12.0 ㎝、厚 5.6 ㎝。

70 は鉄製の大型釣針。頭部は楕円形でやや扁平。針先にかえしは認められない。全長 15.6 ㎝、頭部の幅 1.03 ㎝、体部の幅 0.7 ㎝、先端付近の幅 0.6 ～ 0.8 ㎝。

総括

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物 2 棟、土坑 7 基、井戸 3 基、石敷遺構 1 基、溝 8 条、不定形遺構 2 基である。特筆すべき遺物としては、朝鮮半島系遺物の有溝把手付土器 5 点、鉄製大型釣針、大型土錘、馬歯、多量の甑、主体を占める赤焼土器などがあげられる。以下に概要をまとめて総括とする。

本遺跡は、低丘陵が舌状に派生する谷の肩部付近に立地している。居住域の縁辺にあたるとみられ、検出した遺構は井戸、溝、土坑等が中心である。

調査地内で遺構が最初に認められるのは、6 世紀末の牛頸編年Ⅳ A 期で、溝等がいくつか散見できる程度で数は多くない。

7 世紀前半の牛頸編年Ⅳ B 期になると、SE3、石敷遺構、SD6 が現れる。SE3 は大型の井戸で、石敷遺構は洗い場であり、SD6 は石敷遺構の石の下から伸びていて、石敷遺構に伴う排水溝と考えられる。本遺跡の全遺構のなかで、石敷遺構と SD6 のみに明褐色砂質土が堆積していた。「砂」が二つの遺構だけにしか見られないということは、外部からもたらされた何かを洗い場の石敷遺構で洗い流し、粒の大きい「砂」だけが流れきれずに洗い場と排水溝付近だけに堆積したと考えるのが自然であろう。これら三つの遺構は、一連の作業のなかで使用されたものと判断できる。なお、これらの遺構に SB2 が覆屋あるいは作業小屋として附属するものか定かではない。

7 世紀中頃の牛頸編年Ⅴ期は、土坑等が数基確認される程度で主な遺構は多くない。これは 7 世紀後半から 8 世紀前半にかけても同様である。

8 世紀後半は瓦を伴う SK4、SE1 がある。SK4 出土の軒平瓦（大宰府分類 642 型式）[1] は、夷守駅家の可能性が高い官衙が造営された内橋坪見遺跡をはじめ、阿恵官衙遺跡（糟屋郡衙）、多々良込田遺跡（港湾施設）、海の中道遺跡（津厨か）など、糟屋郡域の官衙に特徴的にみられる型式である。本遺跡の瓦は、内橋坪見遺跡に関連する官衙建物が付近にあったことを示すものと考えられる。

官衙に伴うものとして、製炭土坑の SK2 があげられる。製炭土坑は内橋坪見遺跡でも検出されていて [2]、官衙の建築・修繕等の造営作業に必要とする炭を、作業現場付近で製造していたことがうかがわれる。隣接する内橋鏡遺跡 3 次で坩堝（または取鍋）が出土している [3] ことから、官衙の造営作業に関わる金属器の鋳造を行った可能性があり、このような場合にも当然炭が必要とされる。

官衙に関連する遺物として、水滴、転用硯が出土し、内橋鏡遺跡 3 次では、完形の滑石製「権」も出土している。

これらの遺構のほか、調査区の中央付近で包含層を検出し、遺物がまとまって出土している。包含層は、谷が始まる肩部付近から南西に向けて低くなる地形の範囲に堆積していた。この包含層は、内橋鏡遺跡 3 次で検出した包含層と同一とみられ、本来ならば本遺跡の大部分に包含層が堆積していたはずであるが、後世の削平によって削られて消失し、周辺より低い谷部分だけに残っていたものと考えられる。包含層は 7 世紀から 8 世紀前半ころまでの遺物を含む。包含層の堆積が形成されている時期も SE3、石敷遺構、SD6 などの遺構がみられ、生活の場として利用されている

包含層で検出した遺物のなかには特異なものが多く、本遺跡の性格を考える上で重要である。

まず、有溝把手付土器が 5 点出土したことがあげられる。これは朝鮮半島系遺物であり、粕屋町内では初めての発見となった。しかも、博多湾沿岸で 5 点以上出土した遺跡は、ミヤケ関連施設が検出されている有田遺跡（福岡市）、那津官家設置を契機に出現して渡来人を擁する手工業集落と評価される薬師の森遺跡（大野城市）などに限られる。内橋鏡遺跡 3 次で 7 世紀前半の新羅土器が出土していることをみても、本遺跡周辺に渡来人集団の存在を想定すべきで

ある。包含層出土ということもあり、有溝把手付土器の時期は限定しがたいが、内橋鏡遺跡３次で出土した新羅土器と同じ７世紀前半を想定しておきたい。

次に、鉄製大型釣針と大型土錘（大型土錘は１点のみで、通常の大きさの土錘は 15 点出土）が注目される。大型釣針は全長 15.6㎝で、軸は 0.7㎝の太さがある。かえしはないが、古代に限らず現代においてもかえしのない釣針は使用されていて、かえしがないことをもって祭祀具と判断する必要はない。出土状況をみても、祭祀行為が行われた積極的痕跡は見当たらない。これは実用品とみるべきで、その大きさから外洋の大型魚を対象にした可能性がある。大型土錘も同様に、出土状況に祭祀の痕跡はなく、実用品であろう。地引網漁に使用したことも考えられる。当時の多々良川河口から 1.5km 程しか離れていない立地環境をみれば、これらの遺物は海の漁猟が行われていたことを示すものと言えよう。

そして、土師器の甑の把手が 46 点出土していることも特徴的である。仮に、すべてが二対一組になるとしても、23 個体分の数量である。これは粕屋町内における１遺跡の出土量としては突出した数である。しかも、近くに大規模集落が見つかっているわけではない。現在のところ、本遺跡の半径 900 m以内に７世紀代の集落跡は未発見でさえある。大量の甑は職能的な道具として使われたものと考えるべきであろう。

以上のように、井戸・石敷遺構・排水溝を備えた洗い場施設、博多湾・多々良川を利用した漁労活動、大量の甑の存在から、本遺跡周辺には組織的な保存食生産を行った集団がいた可能性を提唱する。

また、包含層から馬歯が出土した（図 18）ことも注目される。周囲に掘り込んだ痕跡はなく、埋納されていたものではないようである。本遺跡の南東 100 m の内橋登り上り遺跡第５地点 (4) で、牛頸編年Ⅳ A 期以降とみられる土坑から馬歯が出土している。

馬に関連する可能性が考えられる遺構として、本遺跡の SD4、SD5、SD7 のように、弧を描く細い溝で、内部にピットを伴うものがある。同様のものは、本遺跡と同じ丘陵に位置する内橋鏡遺跡１次 (5)、２次 (6)、内橋登り上り遺跡第１地点 (7)、内橋登り上り遺跡第４地点 (8) にも存在する。溝内に板等を据え付け、ピットに建てた柱に固定して柵のように利用したものであろうか。溝で囲われた内側に主な遺構はなく、馬を放していたことも考えられるかもしれない。馬歯の出土が集中することと併せて、馬匹管理が行われていた可能性がある。

このように、本遺跡の特徴は、保存食生産と馬匹管理を組織的に行っていたと考えられることにある。しかも、渡来人集団による関与が想定され、その時期は７世紀前半を中心としたミヤケの時代である。「糟屋屯倉」の様相を明らかにする上で重要な遺跡といえる。

註

(1)『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000
(2)『内橋坪見遺跡１次・２次』粕屋町教育委員会 2019
(3)『内橋カラヤ遺跡第２地点・内橋カラヤ遺跡第３地点・内橋鏡遺跡３次』粕屋町教育委員会 2020
(4)『内橋登り上り遺跡第５地点』粕屋町教育委員会 2020
(5)『内橋鏡遺跡』粕屋町教育委員会 2015
(6)『内橋鏡遺跡２次調査・内橋カラヤ遺跡』粕屋町教育委員会 2017
(7)『内橋登り上り遺跡』粕屋町教育委員会 1994
(8)『内橋登り上り遺跡第４地点』粕屋町教育委員会 2001

有溝把手付土器（手前）［包含層］（図 34–56 ～ 60）と甑の把手

鉄製大型釣針［包含層］（図 34–70）

大型土錘［包含層］（図 34–64）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　調査区南側全景(北東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　調査区中央全景(北東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　調査区北側全景(南西から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SB1検出状況(北東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SB2完掘状況(北東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK1 炭検出状況(南東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK1 半截状況(南東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK2完掘状況(南東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK2遺物出土状況(南東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK2 土層断面状況(東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK3完掘状況（北西から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK4完掘状況（北東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK6完掘状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SK8完掘状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE1【手前】完掘状況、SE3【中央】掘削途中、石敷遺構【奥】検出状況（北東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE1土層断面状況(東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE1完掘状況(北から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE2完掘状況(北から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE2完掘状況(東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE2土層断面状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE3礫群検出状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE3断面状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE3断面状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SE3完掘状況(北東から)

内橋柚ノ木遺跡第2地点　石敷遺構検出状況（北東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　石敷遺構検出状況（北東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SX1、SX2 完掘状況（南西から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SD1 完掘状況（北東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SD4【右奥】、SD5【手前中央】完掘状況（東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SD8完掘状況（南東から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SD6 土層断面状況（南西から）

内橋柚ノ木遺跡第2地点　SD8 土層断面状況（南東から）

有溝把手付土器（手前）と土師器の甕の把手［包含層］（図 34–56 ～ 60）

水滴［包含層］（図32-30）

脚付短頸壺［SE3］（図23-2）

短頸壺［包含層］（図32-28）

須恵器杯蓋［SE3］（図23-1）

土師器杯［SE3］（図23-7）

土師器高杯［SX2］（図31-2）

内黒土器［SK2］（図 11-1）

大型土錘［包含層］（図 34-64）

鉄製大型釣針［包含層］（図 34-70）

赤焼土器甕［SE3］（図 23-3）

半球形有孔石製品［包含層］（図 34-69）

軒平瓦［SK4］（図 13-4）

報告書抄録

ふりがな	うちはしいおのきいせきだい２ちてん
書名	内橋柚ノ木遺跡第２地点
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 55 集
編著者名	西垣彰博
編集機関	粕屋町教育委員会
所在地	〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号
発行年月日	2021 年３月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内橋柚ノ木遺跡 第２地点	福岡県糟屋郡粕屋町 大字内橋（おおやち）566-3、592-2、593-5、594-3	403491	280240	33°37'19"	130°27'33"	2019.4.22 ～ 2019.12.27	822㎡	県道福岡東環状線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内橋柚ノ木遺跡 第２地点	集落	古墳時代～奈良時代	掘立柱建物、土坑、井戸、溝、石敷遺構	土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、石器、馬歯	朝鮮半島系遺物の有溝把手付土器、鉄製大型釣針、大型土錘、馬歯などが出土。

要約

遺跡は多々良川下流域南岸の低丘陵上の標高７m付近に立地する。７世紀代を中心として、掘立柱建物、土坑、井戸、石敷遺構、溝等を検出した。特徴的な遺物として、朝鮮半島系遺物の有溝把手付土器が５点出土している。博多湾沿岸で５点以上出土した遺跡は、ミヤケ関連施設が検出されている有田遺跡（福岡市）、那津官家設置を契機に出現して渡来人を擁する手工業集落と評価される薬師の森遺跡（大野城市）などに限られる。本遺跡に隣接する内橋縁遺跡で新羅土器が出土していることをみても、渡来人の存在が想定されるところである。その他、鉄製大型釣針、大型土錘、馬歯等の遺物は、保存食生産や馬匹管理に関わる可能性も考えられる。７世紀後半には包含層が堆積して集落は終息するが、その後に夷守駅家の可能性が考えられる官衙遺跡の内橋坪見遺跡が近隣に造営され、本遺跡周辺にも官衙関連施設が展開している様子を、転用硯、水溝、瓦、製炭土坑などからうかがうことができる。

内橋柚ノ木遺跡第２地点　粕屋町文化財調査報告書第 55 集

令和３年３月 31 日　発行

発行　粕屋町教育委員会

〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本　株式会社三光

〒812-0015　福岡県福岡市博多区山王一丁目 14-4